

リーズ：15)〔医学 490-O57〕

- ・ジェンダー医学 / 芦田みどり編 . 金芳堂 , 2003
〔医学 495-A92〕

常盤繁 (図書館情報学系)

- ・マルチメディアデータ入門 . コロナ社 , 2003
〔中央 , 図情 007.6-To33〕

徳田克己 (社会医学系)

- ・ヒューマンサービスに関わる人のための人間関係学 . 文化書房博文社 , 2003 〔中央 , 医学 361.4-To35〕
- ・講演集 こころのバリアフリ - を考える . 大森公共職業安定所 〔中央 , 医学 369.27-Ko44〕
- ・ヒューマンサービスに関わる人のための児童福祉論 / 水野智美〔ほか〕共編著 . 文化書房博文社 , 2003 〔中央 , 医学 369.4-Mi96〕

林一六 (名誉教授)

- ・植物生態学 . 古今書院 , 2003 〔中央 471.7-H748〕
- 一二三朋子 (文芸・言語学系)

- ・接触場面における共生的学習の可能性 . 風間書房 , 2002 〔中央 810.7-H54〕

藤川昌樹 (社会工学系)

- ・橋本の町と町家 / 橋本の町と町家の研究会編集・調査 . 橋本市 , 2002 〔中央 521.86-H38〕

堀輝三 (名誉教授)

- ・写真と資料が語る日本の巨木イチョウ . 内田老鶴園 , 2003 〔中央 478.5-H87〕

守屋正彦 (芸術学系)

- ・すぐわかる日本の絵画 . 東京芸術 , 2002 〔中央 , 体芸 721.02-Mo72〕

若林幹夫 (社会科学系)

- ・未来都市は今 . 廣済堂出版 , 2003 (廣済堂ライブラリー : 21) 〔中央 361.78-W17〕



私の一冊

徳田 克己

『ヒューマンサービスに関わる人のための人間関係学』

(文化書房博文社)

〔中央 361.4-To35〕



これまでに刊行されている人間関係に関する図書は、社会心理学の対人関係、コミュニケ - ショ

ン関係の知見が紹介されているものが主であり、個別の職業(特に専門職)養成のテキストや教養書としては一般的すぎていて、物足りないものでした。本書は対人サービスを内容とする専門職の養成段階や現職者の研修等で使用できるように、心理学的な知見だけではなく、サービス対象(患者、高齢者、子ども、障害者など)との良い人間関係を形成するために、また職場(学校、施設、病院)における人間関係を正常化するために、どのようにすれば良いのかについて、その経験を豊富に有する執筆者によって「具体的、経験的に」かつ「客観的、科学的に」、しかも「教育的視点から」解説してあるものです。

具体的には、社会的ひきこもりや付き合いられない人などの病理的な問題、親子関係、夫婦関係、子どもとの関係、恋愛・友情・同性愛、痴呆高齢者との付き合い方、ボランティアの人が障害者との人間関係をうまく作る方法、病者との付き合い方や病院内での人間関係、教師と子ども・



教師同士・教師と保護者などの学校内での人間関係、福祉施設の中での人間関係、アニマルセラピー・携帯メール中毒などが取りあげられています。

本書の最大の特長は「医師は看護師間のトラブルには口を出さないのが賢明である」(第9章, 病院における人間関係)や「妻の学歴が高いほど妻が支配的である傾向が強い」「夫婦関係を継続させるためには、お互いに相当の忍耐力と意図的な努力がなされなければならない」(ともに第3章, 家族の関係)などの、類書では書ききれなかった

伊藤 益

『歎異抄論究』

(北樹出版, 2003年)

〔中央 188.7-189〕



一般に親鸞の思想は「他力」の思想であるといわれている。けっして誤りではない。しかし、「他力」が親鸞思想の原点であり、親鸞のすべての思索はそこから導かれているという解釈は、決定的な誤りを犯している。「他力」は、親鸞がそこに向かって自己のすべての思索を収斂させた、思想的到達点である。本書は、親鸞晩年の高弟唯円の書『歎異抄』を逐条的に論究することによって、このことをあきらかにした。

『歎異抄』によれば、親鸞は、まず「信」とは何かを問う。わたしたちは、通常、「信」とは自身が能動的にもつものであって、自分が主体的に

「真実」とも言える内容が書かれていることです。人間関係は、毎日を楽しむものでもあり、悩ましくするものでもあります。確かに人付き合いは面倒くさいと感じることも多いですが、どうせ人と関わって生きていかななくてはならないのですから、仕事の上でも、日頃の生活でも、人間関係を楽しむ気持ちが大切です。そのための一冊であると言えます。

(とくだ・かつみ 社会医学系教授)

信じなければ「信」など起こりようもないと考えている。だが、こうした「信」についての主体的理解は、親鸞思想における「信」とは大きく食い違っている。親鸞は、「信」は超越者たる弥陀からわたしたちに与えられるものだと考えた。彼にとって「信」とは徹底して受動的なものであった。

親鸞が「信」をひとえに受動的なものにとらえるのには理由がある。それは、彼が、人間をすべからず悪しき者と見たからであった。自分たちと同じように「仏性」を備えた他の動植物を食べ、自身が生きるために常時他者を排除しなければならない人間。そのような排除の構造を抱え込んだ人間を、親鸞は存在論的に悪以外の何ものでもない存在者と見切った。

存在論的に悪なる人間は、倫理に関して無力である。彼は、いかにしても倫理的に善ではありえない。そのような存在者が自分の力で「信」を得ようとしてもかなえられるはずもない。もし、人間が「信」を獲得することができるのであれば、それは、彼が自己の悪性と無力とを自覚し、その自覚に基づいてすべてを弥陀の意思に委ねるという「他力」の立場に立つことによってである。親鸞は、そう考えた。したがって、「他力」とは、悪性の自覚に根ざした、主体的「信」の不可能性への認識から導き出された結論といわなければならない。本書の論旨は、およそ以上のとおりである。

(いとう・すすむ 哲学・思想学系教授)